椿説弓張月　前編巻之四

椿説弓張月

前編

四

（鎮西八郎爲朝外傳）椿説弓張月前篇卷之四

東都　曲亭主人編次

第九回

野風陣没して活路を開
八代殿戦して飛矢に當

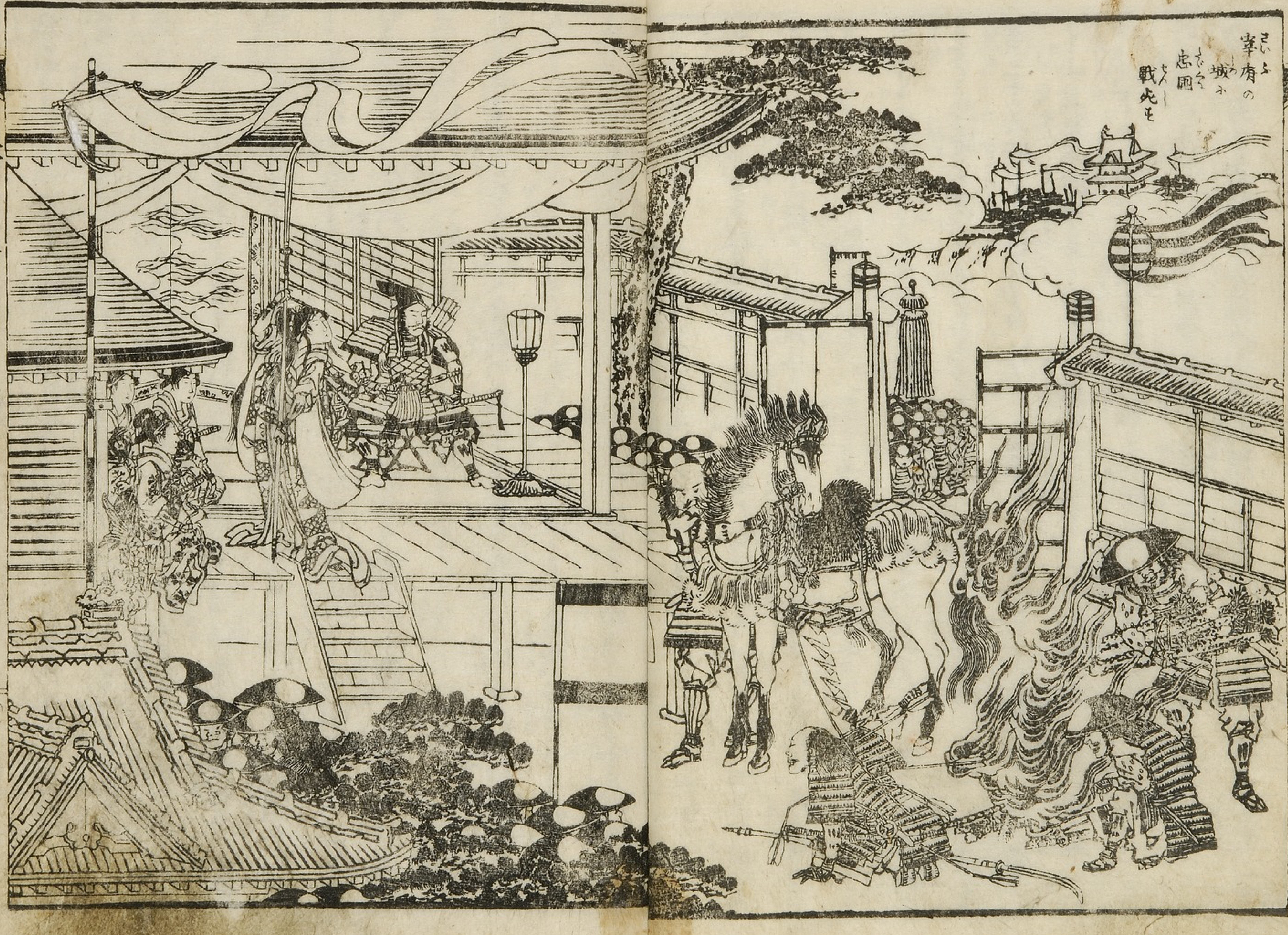
官軍ハ新院をはじめたてまつり。討もらしつる宗徒の武士を召捕べしとて。軍兵処々に部して。隈なく索ねあはせけり。當下公卿僉議ありて。爲朝偸に西國へ逃くだりて。ふたゝび事を起さんば。ゆゝしき大事也。速に彼が妻子を生拘して進らすべきよし。逓馬をもて。菊池原田が許へ仰つかはされ。太宰府ハ遥なれバ。洛に合戦ありしをいまだきこえず。忠國白縫ハさら也。士卒ハかゝるべしとも思ひよらねバ。去年より只そなたの天のみうち瞻るや。御曹司の入りまさん翌や音耗のあらんとて。まつとする程に保元元年七月

椙山女學園大學圖書館

九三日の夜間なるころ。俄頃に忽劇ありければ。忠國あやしく。ひとり臥房を起出。遠侍までゆきてみる時。宗徒の家隷。吉田兵衛高間四郎。連忙しく走り来れり。忠國これを。あなかまや。あまりハ何事ぞと問ば。両人答て。實に洛中鳥羽法皇崩御の折しも。新院御謀反のきこえありて。いぬる十一日の朝より合戦をはじまり。その日の中に新院うち負させ給ひしかば。さるほどに下野守殿義朝は内裏へ召れ。判官殿爲義を始め。六人の子息を将て院の御身方に参りあひしは軍敗れて後は父子兄弟こゝろ四落八落になりたまひぬ。その生死をしるものなし。さるほどに菊池原田が徒。勅命をさしもちて。年来の欝懐を散さん為。只今押寄せ来るとて。ことの外騒動はべるあひだ。このうへ誰が身の定しといふものもあらねど。いとおぼつかなければ。まうさんとかふ。忠國聞て眉を顰め。時もあるべきに。一院鳥羽帝崩ましまして。御歎の気色はなく。却て新院と主上の御位をあらそひ給へるは。ことしかはあれども菊池原田が押寄きたるといふは虚説にもあらじ。為朝久しく洛に在して。宗徒の郎等もおほくは彼地にあり。今この間を窺ひ彼徒がかゝる流言して劫し。直に攻落さんとするにやあらん。さて合戦の用意をせよと仰さるゝおりしも。忽地彼此に喊声發り。餘に響て駿し。吉田高間はこれを聞と斉しく。敢騒がず。さてハ風声虚ならで。敵も間ちかく寄よりとおぼし。それがしはまづ罷向て防ぎはべらん。君はまづ物具めさるべしといひすて。飛がごとく退出けり。當下忠國は白縫を呼て。しかぐの由を告て。鎧一縮して出たり。かくて吉田高間の両人は正門の望楼に登りて。敵陣に對ひ。一院崩御の時に當て。私に干戈を動さんと欲するは何人ぞ。其名を聞んと喚りたり。時に寄手の陣より卯花威の鎧に星白の兜を戴て。佐

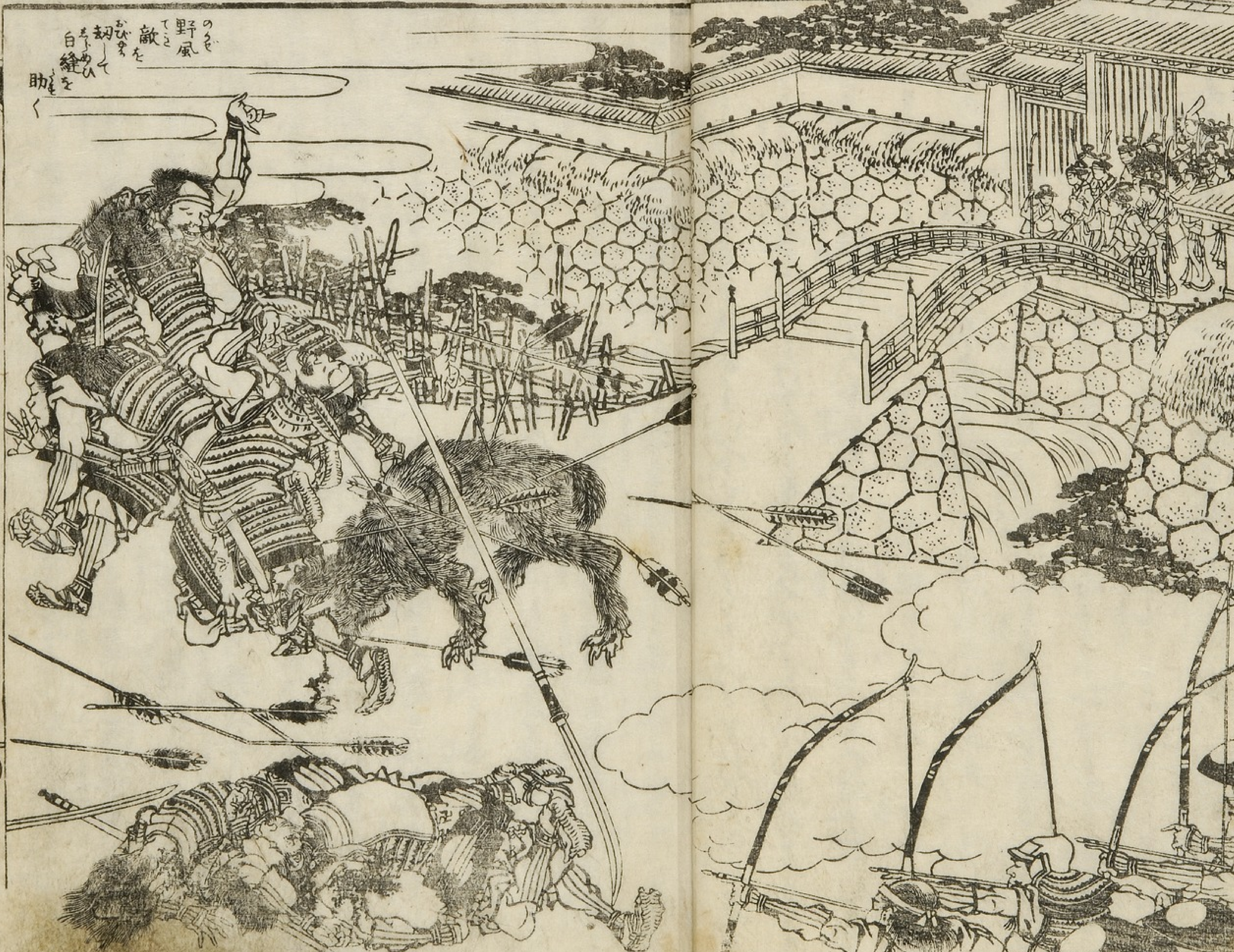
目なる馬に乗りたると。裾縄目の鎧に高角打たる兜を戴て。鹿毛なる馬に乗たる武者二騎。篝火の光に馬をとゞめ汝しらずや洛には新院の御謀反發覺。汝が主君とたのめる爲朝も。院の御所にありしが。いぬる十一日の一戰に。足もなく打負て。生死もしれずなりたるぞ。かくいへば菊池原田が股肱腹心の家隷に王名太郎。宇土平三郎といふものぞ。我が主儀頭に宣旨を蒙りて爲朝が氏族親族を生拘て進らせんと爲發向せりとて弓を伏兜を脱て。縛を受よとぞ回答る。高間四郎囅然とうち笑ひ。九箇國を管領し。武勇海内に輝る。御曹司の伯爺に夜討させたる死神に誘れたる山賊野伏の所為なるらんと思ひしに。菊池原田の輩が勅命を宣ふて向ひ給ふなれば夜も深ければ待設し物こそなけれ。但鏃よく釧たる征矢の用意いたせしに受てみよといひも敢ず。よつ引標と發つ矢王名太郎が内兜

に篦深くぐさと立しかバ。忽地馬より撞と落るを。差詰引詰射給ふ。少し射そらされて色めく処を。忠國は一の木門をさつと開せ。百五十騎の兵を前後左右に從へて。驀地に走出るより吉田高間もこれを見て。矢樓より走り下り。續て敵に向ひ面もふらず挑み戰ふ。寄手は大軍なりといへども死を究したる忠國の百五十騎に切立られ。一町あまり退くを忠國は深くも逐ず。きつるうちへ入りて人馬を休るに。身方も三十騎は深痍をおひ。屓二十二騎は討れたり。白縫は日來雄々しきさうひありて鋲打たる鉢巻して小具足に肚甲さしかため白柄の長刀をまきそへて紀平治が妻の八代以下廿餘人の女使を。こゝに一般に打扮せ。床几に尻をかけて在せしが。又の後方に居たりしが。只今の一戰にさこそ疲労ありつらめ。わらはかはりて一防ぎまゐらせんといふを忠國頭をうちふりて。われかしぬは洛に合


宰府の城に忠國戦死を

戦ありしといふことを敵の流言ならんと思ひしに。今その英氣甚鋭きを見れば。全く僞ならぬもあらざるべし。縦佐曹司敗北ありとも。智勇兼備りて萬夫不當の良将なれば。討死はさすべし。さはあれど。日来は馬前の塵を払し。九箇國の大名も今日忽地讐敵となりて。後詰をなさん便なければ。はや佐曹司が寄手の兵を百騎二百騎撃とるとも。それは千々敢益なし。さしも九州に名だゝる佐曹司の居城を攻らるゝに。女ばらを相語らひ防禦しなんどいはれんも朽をし。それは矢種のかぎり戦ひ。潔く肚かき切んと思ふなれば。後門へ敵の廻らざる間に。佐身はこゝを落られ。佐曹司に環會まゐらせ。我が志をも伴く合戦の容をも抛りゆへと仰されば。白縫涙さしそもそも言ふは女子の身にしあれど。父の子にして爲朝の妻なり。今夫の生死をもしらずして。父又討死あるを外にして。いかで落ゆき侍るべき。稚なき幼きより母御に後れまゐらせ。父の慈愛に人となれば。せめて孝行は竭さずとも。せめて死出の御道すがら。三途の川の筏とも。埋艸ともなりてんと思ふ身を。わりなくも落よ活よと仰するは。味氣なき世に存命て憂を見よとやおぼすらん。父の仰はそむかじと。辭まずして是のこゝろうけ引がたく侍るをいふ。恩愛の切なるは今との一句にあふされ。勇きこゝろもよわりゆく。忠國も顔うち背向。死んとしまふ子の誠を助んとするは父の慈悲なり。そも天地に孕まれて。この世に生を稟るもの。子をおもひ親を慕ふは。天とぶ鳥地を走る獣も異なることなければこそ。桓山の四鳥もとぶにぞその別離を悲まれ。況われは子といふものは只是佐身のことなれば。その年浪のよるぞべ厭ひぞて。あらき風にも當じと養育。成長に及で過世に縁に締ん。思ひしもかけずて源家の佐曹司を壻にとして。望足りぬと思ひしも成者

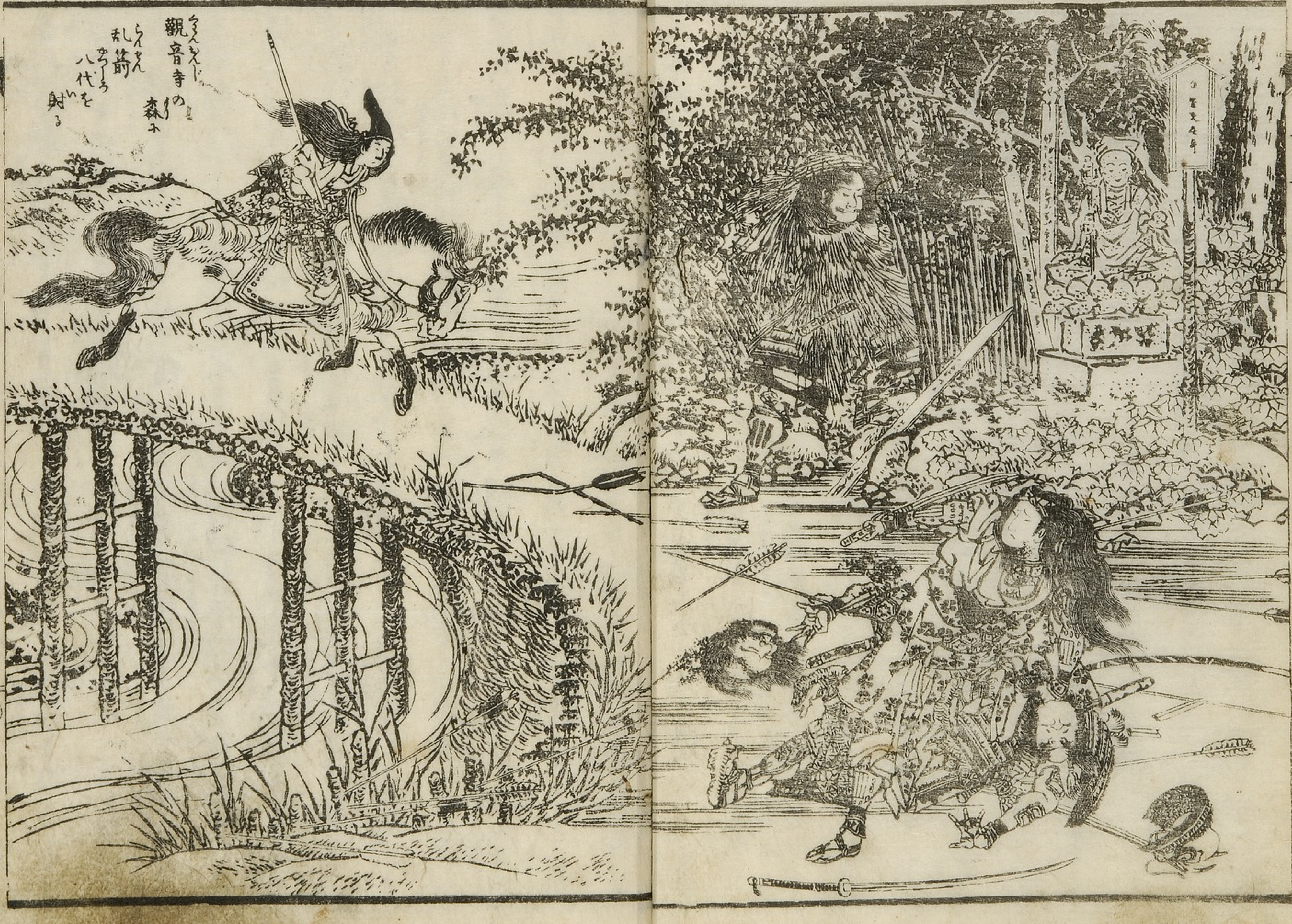
必衰の理を脱れまでど。この大軍を引受て。屍を戦場に曝さるゝなれ武者は常なりかし。敢悔べきにあらざるをおもひ辨て。父が死に悖まず。大なる孝ぞかし。親子は元是一世の縁なり。養の恩をおもひて脱れがたき死を脱れ。又父が亡跡をも弔んとはせずで。いとけなきをしといひ懲を浩然に矢叫閧の声かしましくきこえて。高間四郎は鎧に立矢を影おとし。黒皮威も流るゝ鮮血に紅威と染なさせ大床ちかく走りよりて。敵は既に二の木門すぐ攻入りぬ。吉田兵衛も討れさむらひき。されど防矢つかふまつるその間にとく生害あれかしといひけり。又敵軍に走むかへは阿曽忠國荒介としていざさらば冣期の一戦してこゝろよく腹かき切らんと。その馬寄せよと焦燥つ椽より閃りと打跨。手綱かい操馳出す。父に續て白縫も駈向んとする袖を引とめ八代諫ていへりけるは。夫紀平治も洛にて討死しけりつらんと云へば。さえて存命なさることは叶ずといへども。ほゞかく恃るなる夫の忠義をおもひつゝ君の先途をみとゞけまゐらせんこそ。さるは八代が胸くるしさをもおもひはかり一旦大殿の御こゝろを安めたまはゞ遁れがたくはその時にともかくもなさせ給へかしと。ねんごろに諫まゐらせ。馬に抱きのせまゐらせて。みづから轡を引向ひ。西の門より落行けり。忠國は討のこされる四五十騎の兵を從へ血戦附をうけせしが。終に寄手の軍兵を一の木門まで追退け。その身も許多深痍を負て。舊の處へ立かへりみるに既に落させりとおぼしくて。白縫もあらざれば。かくと喚び高間四郎をちかく招き汝が介錯して首を敵にわたさぬ為ぞ。やがて火を放よといひもあへず。上帯解て鎧脱捨肚一文字にかき切れば。高間は主の介錯して。やがて館に火をかけつ。その身も煙の中に飛入り。灰燼となりて亡になりける程に白縫は八代に九餘人の女



野風（のかぜ）敵（てき）を翻（おびやか）して白縫（しらぬひ）を助（たす）く

侠をねらし西の門より走り出るにこなたも未だ手まわりぬとみえて。闇夜に晃く兜の星ハ片よる白梅頭上に開き。軽盈たる黄花庭除を照らせどに異ならず。敵ハ門を打ひらきてまた城兵ハ落ばこそあれ討留んとむかふる折しも。鳥朝の畜押たる野風と呼べる狼ハ白縫に先だちて門より衝と走り出たるか。軍兵に駈むかひ。當るをさいわひに嚙倒せバひるむを雑兵ハ向脛を咬ミ肩腰を折かし。右往左往に乱ミ騒ぐ紙白縫八代ふハ太刀長刀の刀尖を揃へ咄と噇て走りかかり。東を払ひ西を靡け。終に一條の血路を開きつ。東南を投て走りける狼ハなほ主を輒く落さんとや思ひけん。處も去らず跳めぐりしら矢をも怕ずして刀剱をも避ず。騎馬武者をバ馬の双膝に齧著て友落させ、歩武者をバ砂を蹴かけて眼を遮りなどせし程に寄手これに辟易して。只遠矢に射てんとせされバ野風猛しといへども又鐵石ならざれバ立ところの矢廿餘條に及び。太に哮る一声。終に立縮に死てけり。嗚呼奇なるかな嗚呼痛しきかな猛獣にしてよく人に狎一言の恩を感じて両頭志をおなじくし。身を喪して主の必死を救ふ人間にもなほ稀なる有がたかりし動止なり。この戦果て後寄手の大将菊池肥後守野風がうへを傳へきゝて感激しつゝ士卒彼狼が忠心に類せよとて。その皮を陣太鼓に張らせ家の重器となしけり。建武の手間寂阿武重が時に至てもなほこれを相傳して。數度の武功を顯しけるとなん。間話休題白縫ハ只一方を切脱しつ影の女使も処々ふ押隔られ八代ハ身に從ふものもなく。頃しも九三日の陰魄も山狹に昇るべかめれど。天結陰霾雨蕭

蕭と降出しぐ〳〵路のいと暗きに。武者十騎あまり。蕉火をふり照しつ。一烟走に追蒐より。白縫は且戦ひ且走り。又五七町落伸たりけれバ。八代も後見めりとおぼして。喚べども〳〵回答もせざれバ朽をし。彼を撃せんとされのみ活んやハと知りとち。馬の頭を引かへせバ只今城に火を放しと見えて。忽地西に當りて火光天に衝き熾なるとしく燃揚るなぞ。白縫潸然と涙を流し已なん。父も討れ玉ひなん。まだ母も死ぬべき時至れり。惣身に落伸たり。さりしも後見まかりせしこそ胸るしなれ。さらバ最期を急んとて。城の火光を燭として。舊れ路へ馳ていくとの時。八代ハ白縫を落さん爲。潜に引下りて。ふみて逐ひする敵を拒。二騎は痍負せ二騎を切倒し。首を取て立あがる折しも矢一ッ飛りて八代が吭のあたりへ下と立バ。あわじしもたまらず倒れけるを軍兵四五騎下りたちて。首をとらんと競ひかゝる。白縫を立ながら。遙に見て鐙をあはせ。長刀を水車のごとくふり輪して。五騎が中に蒐入りし。忽地切伏せ薙倒せば。その威勢奮然として當るべくもあらざれバ。こゝな仰ざ視て舌を掉ひ。是ぞ女丈夫と聞えける。爲朝の内室なるぞ。彼いかに勇敢なりとも續く郎黨もあらざるに。只射て落せと罵りて。七八騎の軍兵彼此に立まはれ。木の蔭岳の上より射かくる矢に馬は太腹を射させて屏風を倒すがごとく主もろ共に撲地と顛ぶを。射て落しぬとよろこびておの〳〵弓矢を擲遣棄。太刀脱かざして走りよる。吐嗟白縫撃るべく見える処に。誰とハ知らず道次の藪蔭より。石を飛せる事雹のごとく先にすゝみし軍兵三人立地に打倒さる。これあるハ五騎十騎の半武者



観音寺の森に乱箭八代を射る

なれバ。今助兵あるそろへて。かなハじとや思ひけん。みな四散に逃奔せり。白縫ハその間に突かゝる諸膝を踏ちらし。逃るを逐んとせしとき。とや喃〻と呼かけし。蓑笠被たる大男。藪蔭より走り出被たる笠を脱捨て。ちかく寄るを見するに。是八町礫紀平治なり。白縫ハこハ思ひかけざりしに。落る涙を拭ひ。いかにや紀平治。わが夫にハ恙なく在すや。館をバ菊池原田に攻られて。高間吉田ハさらなり。そが父も討死し給ひぬとおぼし。さりながら人ハ後にこそいかにもならめと。なるべきハ御曹司の御うへと仰されバ。紀平治わりなくうつむき居て。こゝろ易く思したまへ。いぬる十日の軍利あらずして。身方の軍兵大半討死せしといへども。御曹司ハ薄痍も負たまハで。近江のかたへ落たまふとき。白河の山中にて。如此くの仰を蒙り。己ハそれより其処にて別まゐらせ。

夜を日に嗣て走下りしが。今宵城のうちに當りて。遥に火光の發るに驚かれ。なほ逸をいそぎて走来る折もこそあれ。夫人にハ賊の敵に逐留られ既に危くみえ給へバ。石を飛して仇を退け。恙なき御尊顔を拝するぞ。是われが身の僥倖なりと。一五一十を述了バ。白縫ハ為朝の輙く落伸ましゝと聞て。少し安堵られしかども。御曹司にハなほこの世に在しける。詰るひあるこの身より。健氣なりし野風さへ。いと惜きかな八代がことありしことの彼のかたを語り出。漫に落涙ありしが。紀平治も瞼を赤らめ。山雄といひ野風といひ。主にかはりて死したるハ。過世いかなる契かありけん。これを思へバ去年の夏。君が上洛したまふ時。野風が拒よからせしも。かゝるべしとの前象にて。それに引かえ紀平治ハ今宵の合戦にさへ後れたまへバ。只面なくも思ひしに。八代が敵を扶て潔く討死せ

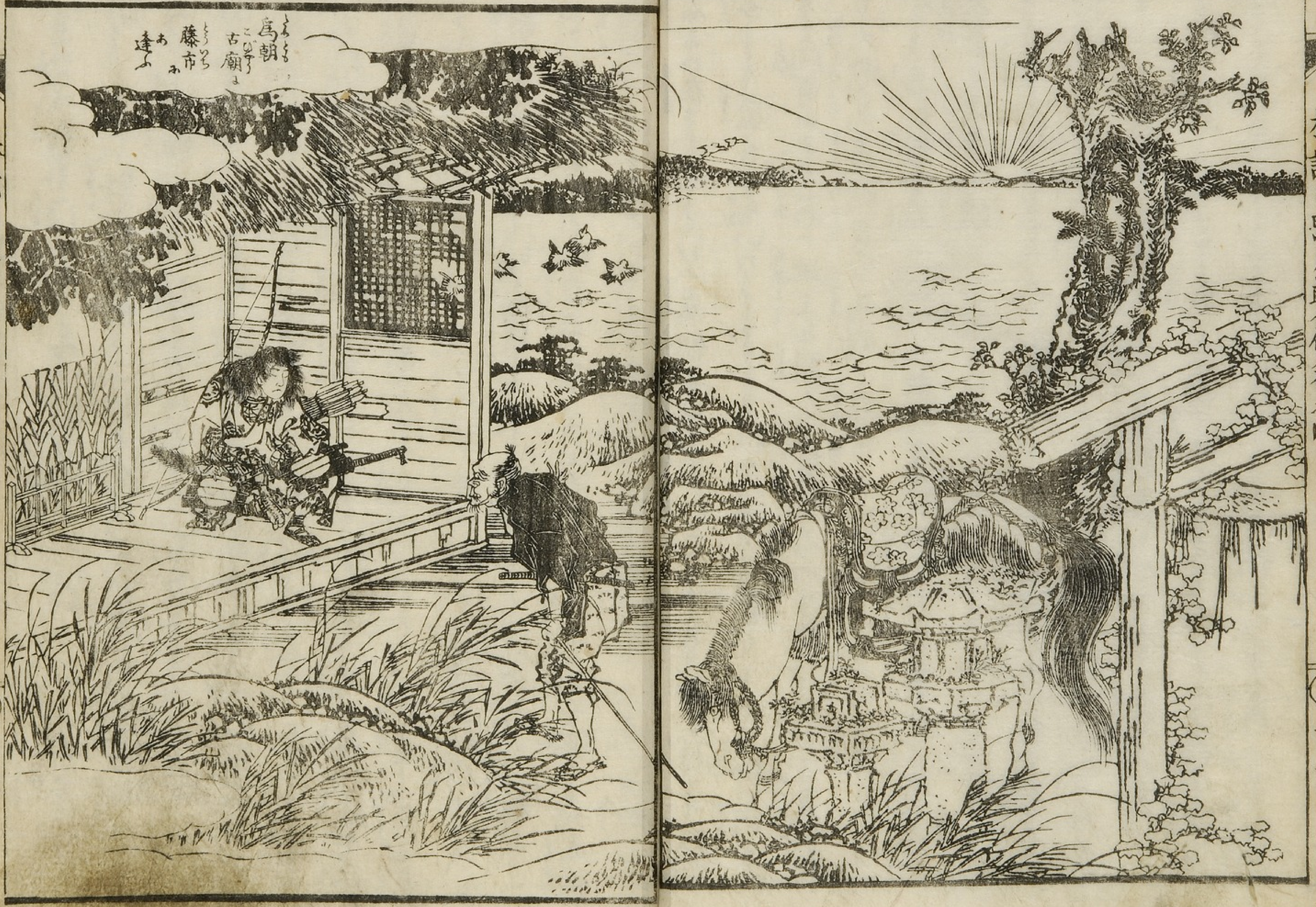
のこ少しハ私かりしかし。とひつて敵の捨たりける。松明の焼さしを拾ひとりてふり照らし妻の死骸を引起せバ。吭より項まで。箆中るまで射徹され血に塗れつ手まりてる。太刀の刃ハさすが齣きて鋸に異ならず。ねがさこそ手いて戦ひつらめと。ありへバえまし白縫も共に歎きの数そひぬかくて紀平治ハ松の枯枝を伐おとし。死骸の上に積かけて。篝火をさしつけつゝ。南無と念ずる声とともに忽地薮と燃あがり烟となりてたちのぼれバ。再び敵の逐来ぬ間に。誘まへといそがし立。主従浦曲を投て走りたる。東雲ちかくなりゆくと経敵に押隔られたる女使ども此首彼首より来りあつまり。有斯ハいよいよ怪しからんべしとて。こゝみつぶ折姿まられ緒ひ笠ふかく打戴て。ゆくべき路もしらぬ火の筑紫を其日船出して。四国のかたへ漕せられ。

第十回

爲朝單騎江州に走る
藤市馬を認て北濱に到る

有左程に爲朝ハ白川の山中にて紀平治を筑紫へくだしつ。よるべなき身もさしてゆく。繋ぬ船のさゞ波や。滋賀の都を後方になしつ。湖水を北へ落あふ頃しも七月十一日のことなるに。昼ハ暑に堪ざりしも夕ともなれバ鶉鳴く。真野の入江もうちすぎて。尾花浪よる秋風に衣吹せてゆくも中濱のあたりを越て。北濱のところさして来ぬるほど夜もいたく深なりぬ。さても借るべき宿もあらぬに。樹の下岩の挾間なりとぞ。霎時憩ハむやとおぼしけるに。路の傍にありける神社のありしかバ。やがて馬より下りて社壇に尻かけ馬に對て宣ふやう。さても汝ハ幸あるものかな。新院がたの戦に勝なバ。父もわれも彩の所領を賜りき。

汝も又玉鞍金勒に栄花を示さざるてさま。かく落人を乗せありきて。さこそねたましく思ふらめ。今ハ身の暇を得させるぞ。いづ地へもとくはさるべし。よき主を求よと仰つ。持たる弓をとりなほし。臀のあたりを打たまへバ。馬ハ忽地身ぶるひし。北の濱方へ馳去れる。かくて為朝ハ社内に勤居て。父の行する同胞のために。宰府に赴せし妻子のためまでも。何となく恋ひはげしく。ひとり廣前に額づき。しづかに祈念しけれバ。簷ちかく飛ぶ螢も。誰魂なりけんと怪しまれ。磯うつ浪音松ふく風ハ。敵の来るかと耳を側てて。まどろまぬ夢に夜も中明ゆく頃しもあれ。外面に高く鑣の音あり。怪しやとて馬のゆくてバ立かへるかと起とりなほち。格子を少し押ひらきて見るに。年紀六十あまりの老翁彼馬を牽て来りけり。この老翁為朝をつく〴〵と見て。君ハ筑紫の御曹司八郎君にハ在さずやといふ。為朝も彼が面影ハ見知るこゝろにおぼえけれバ。さしも一匿なりぞ。いかにもこれハ八郎為朝なり。そも汝ハ何人ぞと問ふに。老翁ハ地上に頭を著。君ハしろしめさずもさぶらはんかし。大殿為義朝臣の馬飼に藤市といひしものなり。この十年あまりむかし。身の暇を賜て。近江ハ故郷なれバ。比良嶽の麓なる荒川の北在家に退居し。獵夫の業をまなびて世をわたりしが。今ハかく老くちて。その業を勤がたさに。人の射とりし獸の皮を買受それを戰人に沽て活業と致すなり。さるにこの比の戰に新院方打まけ給ひしか。大殿をはじめまゐらせ。居多の郎君も往方なく落うせ給ひしと傳へ聞ぬ。かゝる時にこそ賤きもの志をもあらはすべけれ。この里ちかくも来まさんかとおもふに。通夜いも寝られず。あくるを待侘て起出


為朝（ためとも）古廟（こびやう）に藤市（とういち）に逢（あ）ふ

さればこの馬が門に走り来て頻に嘶なるハ。いさとハ落武者の放馬ならんとて熟これを視るに豫て認得ある爲義朝臣の秘蔵なりへりし。唐鞍を置られバさては父子のうちこのてらへ落なりひとく野伏なんどの爲に討れ給ひし。今さらに驚とせられ其の亡骸なりとも尋索てしかるべしとひなぶ。この馬が地より来るを志らずハあれども。むかし馬飼に馴て馬のこころハよく志りたり。馬ハ来し道を忘れぬものなれバ。これが歩むにまかせて索ねなバやと思量し。前に立てゆけりし。馬ハこの社頭に止りて更に動かず。さてこそそれハ社内よりさし覗きまふ君ハむかし幼稚なかりしとさうなりし。八郎君の相貌あり。これをみて出曹司なるを志りて一五一十を述しかバ。爲朝斜ならずよろこびおはし。さは藤市と共にかくありけるかこの鞍しく此

度合戦の料にせよとて。父の賜てありけるに不意も汝が目標となりめるも主従の縁なし竭ざるなるべしと宣ひて爲義朝臣の徃方志れざるなり。さてかく馬を放遣りしわざもを説示しまふまそ藤市ハ或ハよろこび或ハうち泣て。とかくてが家に潜せまゐらせんといふ其の志に悖らんも。却て忌なきに似たり。さらバ志ばし汝が家にありて。竊に父の徃方をも索ねまゐらせてん。さるにてもこの馬の汝を導きしこそ怪しけれ。これハ全く神明の冥助によれるなり。さてもこの社ハ何の神を祭りまゐるにやと宣ひて。明ゆくまゝにうち仰ぎて見給へバ。八幡宮の三字を写しける額ありけり。誠に氏の御神の御導志まへるなる疑ふべうもあらず。これバ馬をバ直に進らせてべしと云へども。そのかくしさ廟祝さへなしと見ゆる神祠に活る物を進らせんもよしなし。これをバ男山へ献らんと宣ひしが。四五日のうち藤市

はこの馬を牽て八幡へまゐり。鞍置たるまゝ彼神社に進らせ潜に主君の武運を祈念して。次の日荒川へかへりけるとぞ。

第十一回

揚梅瀑布に御曹司山猱を殺
石山温泉に武藤太舊主を賣

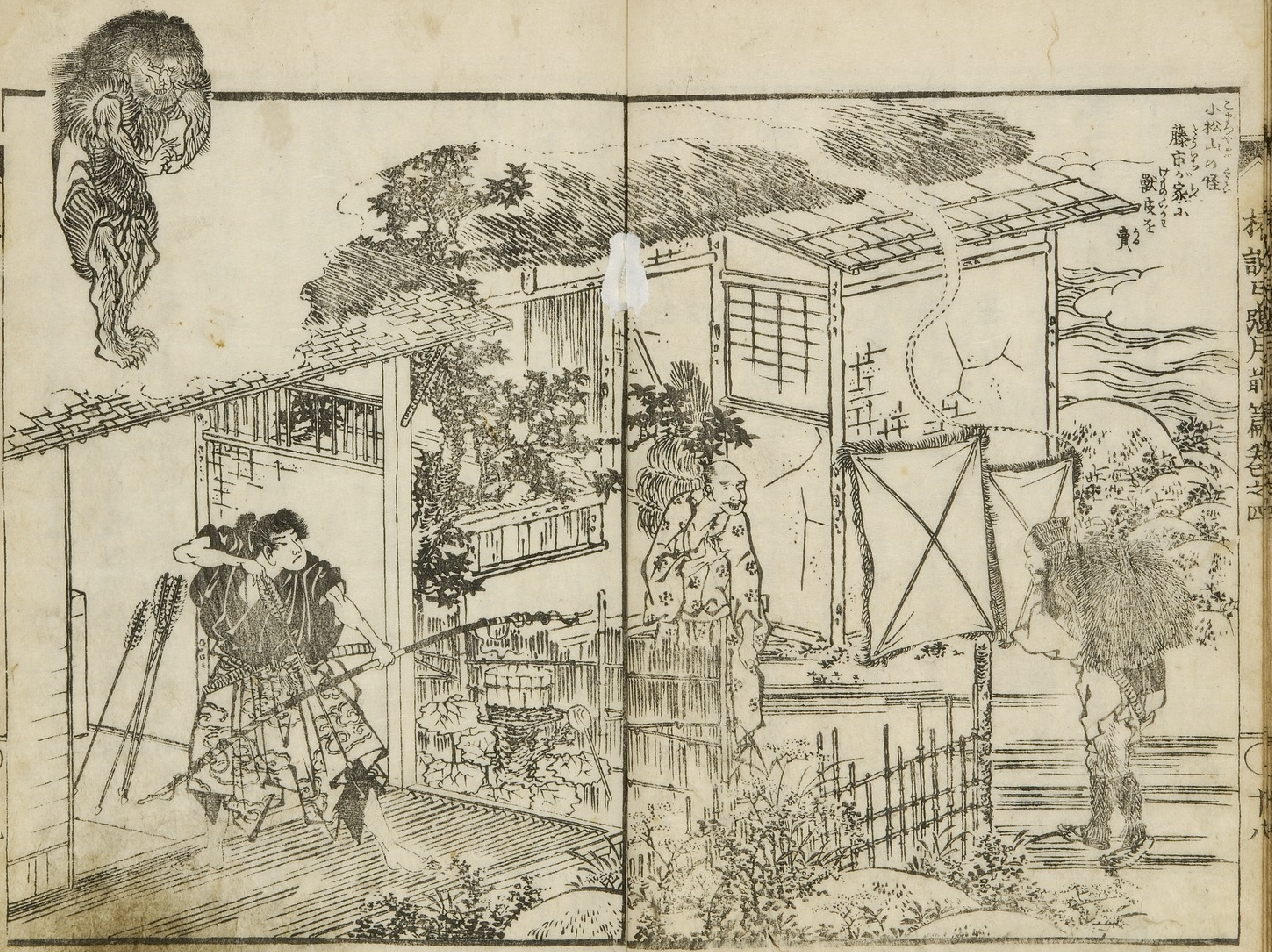
爲朝ハ藤市が誠忠を感じ給ひ。その日誘引れて荒川に到りて給へり。此ところ山ふところにして。世を潜に究竟の地なれバとて。まづ親同胞の往方をも定め。聚會ることもそ。ふたゝび事を謀るべかれと議したまふに藤市を妻もなく子もなく。身ひとつのきやすさハ生活の間あるをり〳〵。大津坂本のほとりに出て。世の風声をきかんとしつゝも。楚とゞ定めあるゝすく〳〵うち過せしに七月の下旬に及て。有一日中濱へゆきて出るが。はくさ〳〵より社もなく忙しく走かへりて。爲朝のほとりへ進てまゐり。今宵大殿の御往方を探定めがたく。ゆくといひもあへず涙を潸然と落しけれバ。爲朝うち驚きて。あないかなる。父君捕れ給ひつるかと問給へど。しばし藤市ハ回答えせざるせそておほしぞ[illegible]て中瞼をすりてちらひ。さても人の中を聞ぬる日軍敗れ付。左府頼長公ハ流矢に項の骨を射させて薨まし給ひ。新院して爲義朝臣をはじめとして。光弘季能なんど僅五七騎に供奉せられ。如意山に入らせ給ひ。こゝにて人々に暇をたまひ。光弘季能のみを召倶して。知足院の邊なる。あやしの僧房に入御ありて御髪をおろし給ひしかど。終には探し出されまして。讃岐國松山へ遷され給ひぬ。又爲義朝臣ハ五人の御子達とゝもに東國へ下向あらんと議しあるに。俄頃に病著に臥しまして。そのまゝへて今ハとて思ひきえ墨の衣に容を變て。嫡男義朝の館へ赴き給ひ。頼賢頼仲。爲宗爲成爲仲との五人の御子達も

勢力竭て搦捕られ。こゝに義朝に預下し給へり。こゝに少納言入道信西まそ爲義御父子を害せん爲清盛と示し合せその叔父なりける平馬助忠正これも新院へ召れしが。降人となりて出けるを清盛うけとりて首を刎ぬ。そのこゝろ清盛既に君の爲に叔父を誅せり。義朝も又父を討よといはん爲也。されば義朝に仰せて御父爲義法師以下五人の兄弟を誅せしめ給ふに及て。義朝ふかく推辞すべくもあらで。痛しや大殿をはじめ奉り。御兄弟こゝに船岡山にて首を刎られ剰へ幼稚在せし乙の御子をも討せ給ひつ。母君は八幡詣のかへさに。このよしを聞食て悲歎せるとなりけん。五條桂川へ投給へりと。いまだ語りも果ざるに。爲朝涙泉のごとく。悲しきかな父母兄弟こそ黄泉の客となり給ひぬ。爲朝ハ恙なくて存命て何かハせん。父の仇は兄義朝也。向にまれ二條河原の一戦に只一

矢に射ざりしを。縦君の爲とて。兄を討んは獸にひとしと思ひし。兜の星を射削りて走らせたりしが。心のありと思はゞ胸さきを射徹しつらんものを。今はいかに悔しむもかひなし。直に洛に潜上り義朝信西が首を捩切て踏碎き刃のはぶらん迄切死すべしといさみたちしが。物狂はしくふるまへば。藤市は前に携て後方にもちこへ日来に似げなくも見えのふよしやその人を撃なんとも。いかばかりの孝養になるべき。只永く亡跡を弔なんこそそれのみ勝るべけれなど。さま〴〵に諫としかば。いよ〳〵ふかく潜せまゐらせられ。爲朝つく〴〵おぼしけるは。筑紫にありしとき既に九箇國の民の心を得たり。とかく宰府に下りて再び九州を切従へ新院を竊出しまゐらせて。重祚なし奉りて日本國の摠追補使となりて膽太くも心を安じつゝ。宰府の形勢を守せまうに城并菊池原田を攻

られて。男忠國も討死し。白縫も焼死せりと聞えし程に。ゆゝしく憤りに迫りながら。人にして肘なく。鳥にして翼なきがごとく。既に左右の佐をうしなひて。速なる事を成しうべからざれば。心ならずも又徒に日を過しはべり。しかるにこのごろ藤市が家へ。夕ぐれ毎に獣の皮をもて来て賣る。五十あまりの男ありけり。これが来る毎に。爲朝の弓弦おのづから断しかば。ふかく怪み。有日藤市にしか〴〵の物がたりして。彼男はいづ地のものぞと問ふに。藤市答て。それがしも楚とはしらねども。北方なる小松山のふもとに住むよし。彼らがいへり。件の男この春のころより皮をもて来て賣に。いかにして獣をば取らん。皮に鏃の痕もなし。全く疵なき皮なれば。その價をまうしたれど。敢て價を論じもせず。こなたよりとらするまゝに。錢をえてかへりゆくといふ。爲朝のおもへらく。さればこそ怪物なる。且彼が来る時にそが

弓弦の断るゝ事既に數回に及べり。わが弓は五石にあまりて強もいと太やかなれば。おのづから断んやうなし。かゝる事ならんには蟇目をもてこれを試みべしと宣へば。藤市は縁由をしらで。不意も毛骨悚然ておぼえける。且しといふ毎に。今も[illegible]怪しとする[illegible]もあらず。宣はく引目のうへに虫の蟇といふ字を書るは。いかなる故ならんと問に。爲朝答て。まづ夫引目鏑の名あるよしは。鏑の四方に目をゑりて。ひきを蟇の目に象るとぞいひて蟇目と稱せり。蟇は陰物の祖にして。月中に胎托せり。この故に鬼魅ことにこれを怕る。且弓はこれを月に擬へ。矢を刺と上弦とし。人引満るときは望月に象り。發つの後を下弦に表す。一月三十日の象は即一弓の上に明にして。表裏陰陽の徳を備へ又上下日月の象あり。天の二十八宿。地の三十六禽。ことにその氣を籠るといへる

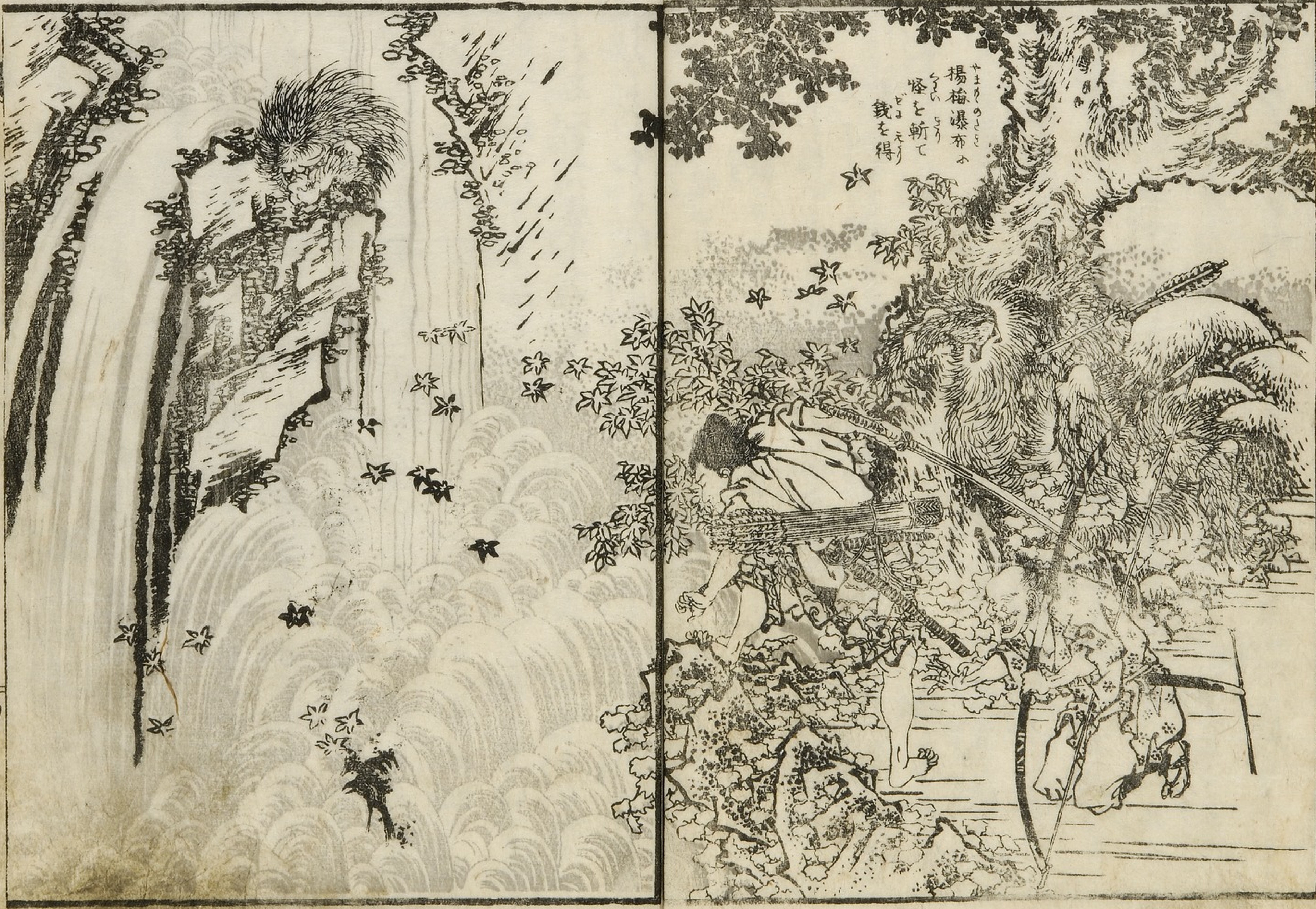


小松山の怪
藤市が家に
獣皮を
賣る

なし。又鳴弦は弓弦を鳴らすのみにして矢を發さず。弓はかならずしも白木を用ふ。男子生るゝとき蟇目鳴弦の法を用てするものは。桑弧蓬矢その純陽を取てもて邪魅を征し。志を四方に示すものなり。よく翌はかならず彼が妖の蹤をあらはすべしと宣へば。藤市ふかく感佩しつ。その夕ぐれをまちわたりつ。かくて為朝は次の日蟇目の法を設て彼男をまちけるに。秋の日は暮やすく遠き寺々の鐘おとづれて。日も山挟に向入とするとき。件の男生平のごとく獣の皮二三枚を脊負ひつゝ。藤市が家の前よりちかく來る。既に門に入らんとしてたちまち仰ぎ呵々と冷咲て裡へは入らず。踵を回して舊の路へ走り去るを。為朝は物の隙より見そなはして。さればこそ妖怪なれ。迯るとも迯さじとて。弓矢を手挟て追蒐るに彼は趍ざる事はなくもなく。いと徐なるものから。あれどその疾き

馬の馳がごとく。いかに追ども間ちかくも追つかれず。比良の峯方も打過て。南小松と北小松の間なる。楊梅の瀑布のほとりに至りて。忽地彼男を見うしなひつ。これは朽をし。遠くも隔らざりしに。いづ地にか身を隱しけん。彼が栖は正しくこのあたりなりとおぼしく。彼此を見るに。かの瀑布の左手にすこし坦地ありて。ふりたる榎の枝葉生茂れるあり。彼がこの樹蔭なんど躱て居るならんとて。芽萱踏わけ入りたるに。猛然として彼男榎のうへに立あらはれ。半弓を設て坪と發つ矢。過ず曹司の面上に飛來るを。身を背て避ながら。矢は腸に丁と立を。立しもおかで擇捨。彼は矢坪をさへて太く慌。二の矢を刺んとするところを。為朝よつ引て射たまへば。鳩尾骨碎てうしろへ射徹し。鏃あまりて榎の幹へ一鏨抗て縫とめらる。されど彼は頓にも死なずして。手足を悶掻て脫まんとす。為

朝これを見まひて。弓矢をバ戛離と投捨。太刀抜挿頭て走りかゝり。首を礙と切すれバ。俄頃に山鳴り瀑布浮騰。風又颯とおとし来て。木の葉を飛し砂を巻揚。四方晦然として。しばしハ物の善悪もわかず。その時しも藤市ハ炊曹司のうちにありけれバ。蕉火ふりてらしてその跡を慕来つ。や風おさまりて後走り著この光景を見てうち驚きつゝも。まづその故を問に。為朝ハ今この妖怪を射とめたる首尾を説示しけるに。藤市これを伴て。おそる〳〵蕉火をちかくあげて。これともよく見れバ。五十ばかりの男とおもひしハ。身丈一丈にあまれる獣なるが。針のごとき毛斑に生出。手足ハ漆を塗たるがやうに黒くして。爪の長二寸に及べり。首ハ遙に飛て。右手なる岩角に噬著たるが。その面狙に似て狙に異なり。頭の毛ハ雪のごとく白くて。長二三尺もあるべく。唇厚くまくれて鼻を掩ひ。口ハ方に裂て。尖き牙あり。既に死たれどもいまだ目を閉ず。瞳の光人を射る。さながら生るが如し。為朝よく見をはりて。これハ何といふ獣なるぞと問給へバ。藤市答て。それがしむかし山獵に夥の年月をおくりしかど。いまだかゝる獣を見ず。そハ世にいふ山𤢖なんどいふ實有なめりとて。彼が栖を見究めんと宣ひて。藤市とともに榎の背に到りて見るに。果して一ツの洞ありけり。その廣輙く人を容べし。やがて裡に入りて見れバ。ふかさハ七八尺に過ずして。裡にハ獣の骨を堆高く積置。又錆たる銭居多ありて。土に著たるハ朽腐たるもおほし。便藤市に仰せて。銭をバ外面へ運び出させて宣ふやうハ。この妖怪毎日に獣を射ころして。肉ハおのが食となし。皮をバ汝が家にもてゆかせて鬻ぐるものぞ。その皮に鏃の瘢なかりしハ。彼が射つる矢の。まさに面上つ飛来めるにうち走れバ。もし尋常の人にありせバ。忽地眼を射らるべし。そも



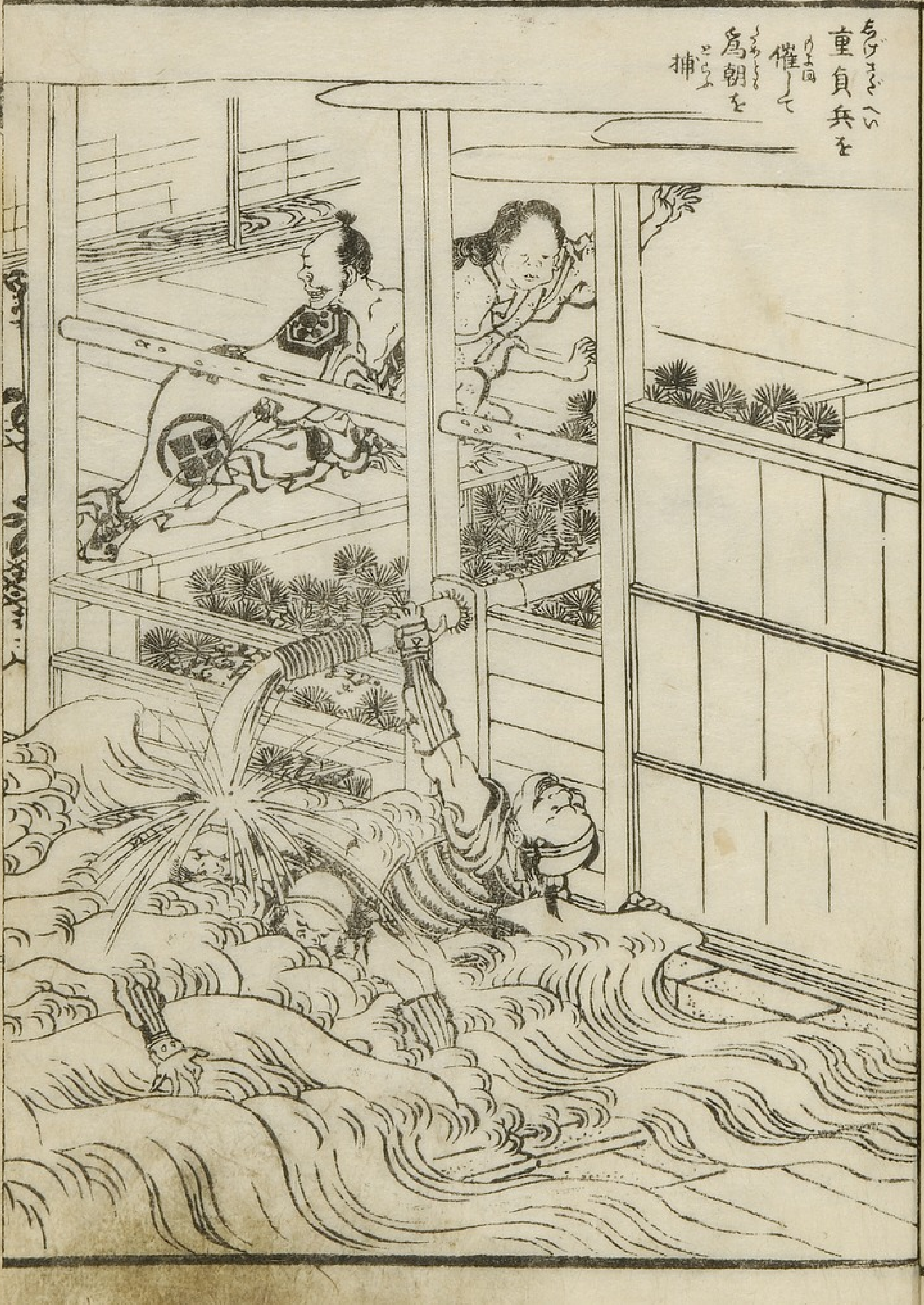
揚梅瀑布に
怪を斬て
銭を得

何をかくゝ弓矢とみなしつらんと宣ふにぞ。藤市も仰寔にしかりと回答て。その弓矢を拾ひとりてみせまゐらするに弓は黄櫨の幹に竹を合せ藤蔓を巻て作りたり。矢は又獣の骨を削りたるものとおぼし。これらはたゞに焼捨よと仰すれば。藤市こゝろを得て山操が首をもひとつに寄せ柴折くべて是を焼捨。軀の皮を剥とりて銭を裹て藤蔓もて楚と脊肩に負ひ。うけまだ得つきたりとうち笑へば曹司も咲坪に入りて。このさとの人は志らでゑうふさでまことの妖怪を輙く殺せりと聞えるハゞ。かならずも怪しめられて身の大事に及びなんあなかしこ秘すべしと宣へば。藤市げにと點頭て。共に家路に赴きけり。さる程に爲朝の矢瘡その夜戌頃に痛み出ていとも堪ず。かくつええまくハ藤市うち驚きて瘡口を洗ひ毒を去りて。膏薬を附まゐらせなどすれども速には愈べくもあらず。かゝる金瘡には石山の奥なる

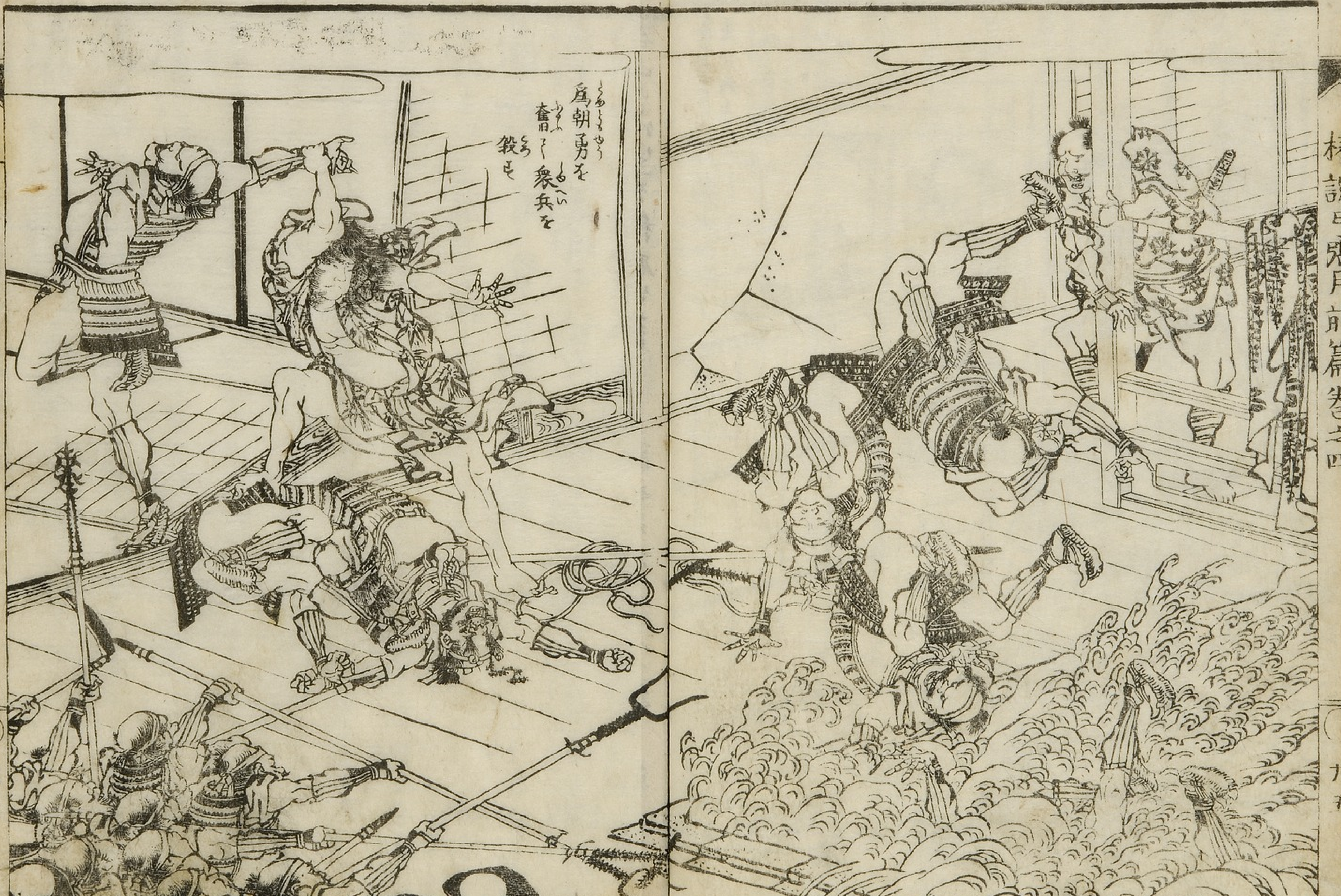
温泉に入りなば日ならずして平愈あらんずと藤市がやよまうせすとしおとゝらば彼処に赴きて保養せんとぞ宣ひけることに又藤市が甥に武藤太といふものありけり。彼幼稚て父母を喪しかば。藤市養ひとりて子とし尻田の浦なる豪家にはからひして。小廝と為しおきつるにこの三年あまり前に賤主人の銭を盗みてみな淫酒の爲に用盡せしを發覚主人大に怒りて武藤太をば直に藤市が家に領来速に彼銭を返し納よと責む。もしとのゝる等閑に閣ば官府に告訴まうすといひて。武藤太はさふらひなり。藤市あもうかにせめえせてんといひ。藤市これに迷惑しからうじてその債を償ひ。武藤太をば勘當して忽地に追ひ出しけり。かくて武藤太は京浪速を徘徊し。あしき友のもと交參て賭をとのみ酒を嗜み。あるときはあるにまかせて明日の貯をおもはず。なきときは人なきさまにすら物を借りて返

さるのみか世をすぐすに渡りしが。近来うちつゞきて賭に負。すでに邪智も用る処なりけん阿容々と荒川へ立入り。てうら人をすかして匿しく只顧先非を悔るおもむきして。村長なるよしをそのまゝ藤市に陪話しける。藤市もそのかみの縁ハさらにうけ引ざりしが。つら〳〵とおもふやう。われかく老てもとより兒といふものもあらざなりとのまゝにふく世を辞らバ誰ありて後のことをも経営べきぞ。甥志を更たらんにハ大なる幸なり。加之旗御曹司の湯治したまへんに彼を召倶しゆきたまへらバ便よろしからんと深念し陪話らせてあつかひしかバ。遂に勘當を許し。今般向後を誡しむ。その行ふ所をみるに旦ハ朝まだきに起て夜ハ子四つころまでも寝もいねで真實やかに動止しけれバ藤市も安堵して。まづ為朝にもおもむきを告まゐらせ有一日武藤太にいへりけるハ近曽てう家に在るむかしまうるし時。ふかく恩恵を稟たる人の子なり。此度所用ありて加賀國へとて下りしに折しも俄頃に病てわが家に立よりしを。保養しあはれなるより。石山の奥なる温泉に入りあらバよろしかるべしといへども。これハ生活に遑なきゆゑ従ひゆくべきかたなきぞ。汝これにかはりて彼処に赴きよく心を用ひて勦りまゐらせよといへバ武藤太一議にも及バず承りぬべしといふ。この時為朝の矢瘡まだしもおこたりて歩行も亦自在なりしかバ。次の日武藤太を將て石山へ赴き。七日ばかり湯治したまひしに全く愈ざれども湯も亦相應せりとて入に。武藤太ハとかくに到らざることなく信しく勦り進らせつ。竊におもひけるハ。これ洛にありしとき世の風声をきくに鎮西八郎為朝を搦捕て出せしものハ忠賞抜群なるべしといへり。これ彼人の模様をみるに身丈ハ七尺あまりて面魂凡人ならず

ぞ。又そのなすところを見るに農業商賣にをさをさ疎し且それが叔父むかし恩を稟る人の児なりと稱してこれは傍侍するさまさながら主君のごとし。彼これおもふにこの人爲朝に疑なし。これ今告訴して過分の恩賞に預らば福貴ならんものをとふかく心ぐみひそかに楚見究るすべもなくて人よく人せば毛を吹疵を求るなりとやせはしかくやせまじと思ひし躊躇しつゝ侶とこころつくるのありて爲朝の湯に入りすみを窺ひ湯桁のほとりにゆきていふやう凡湯治する人按摩して経絡忽地に整ひ効驗速なりと笑て浴するにも泥ぬくるはよろしかゝるなりければ肩癖をも捺てし垢をも流しまゐらせんやといふ爲朝は心もつかすなりそのいひ寛るをよろこびけるに彼がいふにまかせすに武藤太は思ひしその肩をゆるく退出つ竊に笑を含み彼



重負兵を催して爲朝を捕



爲朝勇を奮て衆兵を殺す

為朝ハ。左手の肘右手に四寸伸て。矢束を引と世に起えつれど。これ今彼人を按摩するに。その肘をよく見れバ。果して　左手ハ右手より長し。かゝる證據のあるなれバ。更に疑ふべうもあらずと。既に心ハ决しながら色にも出さで。詰朝又為朝にいへりけるハ。それがし曩昔の夢に。藤市が病死しつるを見つれバ。何となく心安からねバ。よりて今日荒川へゆきて安否を問ゆかで立かへりゆかんとて。誠しやかに告しかバ。為朝ハ漸くるゝとも志りまでぞ。老たる養父を家に置バ。さありなむとかくも疾ゆきて緩ゆるりかへり給へと仰されバ。武藤太よろこびて忙しく走り去。直に領主佐渡兵衛尉重貞が館に到りて。ありのまゝに告訴けり。重貞ハ武藤太が告上を聞て。家隷郎黨をあつめ。俄頃に三百人の土兵を催し集め。武藤太を案内として。石山の浴室を稲麻竹葦のごとく圍せ。力士十五人を擇て。熊手太刀をバ持せて。まづ武藤太をもて潜にうかゞハせける。この折しも為朝ハ浴して在せしが。武藤太つとまいりて。只今かへり候といへバ。為朝ハさいひの答へやらで。しと宣ひて湯を出んとし給ふとき。十人手組して犇々と寄せあつまり為朝を侍と見まはして。こゝろ得たりといひもあへず。六人を攫廻吭締て捨。殘る七人左右より矢庭に組んと閲を。忽地二人を丁と蹴殺し。又近よるをバ湯桁に押當着ふると捻切捨。或ハ拳して打倒し。足にかけて踏殺し。一息吻て立たる人ハ。血ハ流れて温泉を染。屍横りて累しけり。為朝ハ既に武藤太が告訴せしを志りたまへバ。甚しく憤に堪ず。これを責りて。栄利に走る其愚者め。逃とも逃さじといひつゝ走りかゝらんとし給へバ。武藤太大に怕恐て。浴室の楼と鎖し。彼甚勇力あり。とく火を放て焼殺しまへと叫けれバ。為朝奮然として浴室を打破り。柱一本かろげに引抜。武藤太を打挫んとて

追蒐のかたを待設たる重貞が家隷ども蒐隔て。これ組留んと競かゝる。為朝なりとも、さなくとも彼柱をかりまはして打殺し敵伏縦横に礙ずて働きもなしぬれど矢瘡いまだ愈ずして合期ならざる時節なればさしもこそありけれむかし臂より勢力究りて不意撲地と倒れきを大ぜい八騎の捕夫走りよりて是をれ取つき傴りていやがうへに打累なるその膚臥つも打退蹴返しまひしかど五指のかゝりし弾んより一拳にさしも小ハ大に敵しがたければ終に生拘られ給へるぞうたてしき。抑この日為朝一人を搦捕らんとて打殺さるゝもの三十余人傷つくもの五六十人に及べり。まいらく湯治の為とて居あはせたる老幼男女ハ駭き怕れて逃まどひ踏仆され壓にふされて生死をしらず。しかれども重貞ハ為朝を搦捕てかくと繧ひずして内裏へ引てまいりければ彼ハ音にきこえたるものなりと叡覧あれ奏しとて周防判官季能これを受とりて白き水干袴に赤き帷子を被せ髻に白擲をさゝせたり主上（後白河院）ハ北陣にて叡覧ある。公卿殿上人ハさらなり。これをみるもの駭然として舌を巻實との為朝ハ凡人にあらず。身丈の高やかなる筋骨の逞しげなる。しかも重瞳にしてまた國の項王ともいふべし。この人ならば矢瘡に悩れ折ならずハ縦千万騎ありてむかふとも輙く搦らるべくもおぼえずなど。さゝやきあひぬれど為朝ハちとしも臆せる氣色なくして自若としておはしければ。重貞ハ此度の功によりて左衛門尉に補せられこよなき面目をほどこせり。

椿説弓張月前篇巻之四 畢

二番冊

極意秘傳